
なんてったって僕はクリスマスにデートをするリア充

久保田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんてったって僕はクリスマスにデートをするリア充

【Nコード】

N6108Z

【作者名】

久保田

【あらすじ】

寂しいクリスマスが決定したあなたに送るハートフルボツコスト
ーリー。

（前書き）

キヨウサクさんとランカちゃん
のクリスマス。

「なんてったって僕はリア充……！」

毎日見る鏡に映る自分は、いつもと違って見えた。何故なら今日はクリスマスだ。

街を歩けばカップルカップル。右を向いても左を向いても、カップルしかいないようなクリスマスの夜。今まで奴らを敵だと思っていた。

だけど今年は大学の同級生のランカちゃんとデート！

まだ付き合ってるわけじゃないけど、クリスマスにデートしてくれるんだから芽がないわけじゃないはずだ。

「勝ち組！僕は勝ち組だ！」

今日のためにファッション雑誌を買い込み、研究に研究を重ねた僕に隙はない。『伊達ワル』と呼ばれるスタイルを極めた僕は、まるでガイアが輝けと言っているかのように……とまではいかないけど、そんなに悪い感じではないはずだ。

鼻毛も出てないな、うん。

「よし、僕はやるぜえええええ！」

「……お兄、うるさい」

「やあ、まいな。今日も可愛いね！」

高校生にもなるくせに、中学のジャージ着てクリスマスに用事のない（笑）妹が僕の部屋にノックもなしに入ってきた。

いつも死んだ魚のような目をしているけど、今日は更に活きが悪い。　んー、まあ仕方ないよねークリスマスに用事もないんですからねー。

「ふふん」

「……キモイ」

おっと、思わず負け組を哀れむ気持ちになってしまった。　つい見下した視線を妹に送るだなんて……リア充らしからぬ行いでしたね、ワハハハハハ！

普段はグサグサ刺さるまいなの毒舌が、今日の僕には通用しない。

「ごめんな、まいな。　僕はもうお前だけのお兄ちゃんじゃないんだ」

「真面目にどうでもいい」

「おっと、こうしちゃいられない。　待ち合わせに遅れるわけにはいかないんだ。　アディオス、まいな……次に会う時はきつと大切な何かを捨てた男になった僕のはずさ。　アバヨっ！」

「出来たら二度と帰って来ないで。　マジ気持ち悪い」

家から二駅離れた駅前はまだにクリスマス一色。　暗くなり始めてきた夜空に、星々よりも明るく輝くイルミネーションが栄える。　去年は木にイルミネーションを巻き付けたら可哀想だろうが！　と思っていたけど、これは違うんだと理解出来た。

イルミネーションを巻かれた木達は、僕達カップルを祝福してくれているんだ。

そう思えば雪の降りそうな寒空の下、二時間待つのも苦痛じゃない。遅れたらいけない、と思って早めに家を出てみれば、信号機には一度も引つかからず、駅に辿り着いた瞬間に電車が到着した。アレキサンダー大王は百万の矢の中でも傷一つ負わなかったように、今の僕には運命という名の強い味方がついていて。

時計を見れば待ち合わせの時間まであと五分。

「僕はアレキサンダー大王だ僕はアレキサンダー大王だ僕はアレキサンダー大王だ……フヒュー」

緊張のし過ぎで呼吸がおかしくなってきた。大丈夫、アレキサンダー大王が地球なら僕は宇宙大將軍。いける、いけるさ！

そんな事を考えながら、ぐるぐるしていると携帯電話が鳴った。着信は……ランカちゃん！？ ま、まさか何かあったのかな！？ それともやっぱり嫌になって来たくなかったとか！？ ええい、とにかく出よう！

「フヒュー」

「あはは、なにその声。こんばんは」

「う、ここんこんばんは！」

ランカちゃんと電話するのは初めてだけど、声だけでも可愛いなあ。

だけど、明るくてハキハキとしたランカちゃんの喋りに、暗い影が落ちた。

「あ、あのね……ちょっと言いにくいんだけどね」

「あ、うん……」

やっぱりな、という感想しかなかった。

僕みたいな貧弱コミュ障根暗眼鏡が夢を見て、女神のようなランカちゃんとデート出来るはずがないじゃないか。

でも、大学で初めて君を見た時から、ほんの少しでも近付きたかった。団子虫の分際で君と釣り合うとは思っていなかったけど、綺麗な夢を見せてもらった。

さあ、帰って今日はまいなと鍋パーティーをしよう。

「ランカ、あなたの後ろにいるの！」

「うひゃあ!？」

いきなり背中当たる柔らかな感触に、僕は心臓が飛び出しそうなくらい驚いた。

「ごめーん。ちょっとびっくりさせようと思って。でも、うひゃあ!はないよね、うひゃあ!は」

「だ、だっていきなり来たら、誰だって驚くよ！」

そう言って笑うランカちゃんは、もう言葉にならないくらい可愛い。

ランカちゃんはあまり派手な服装じゃなくて、どちらかという土地味な感じだと思う。だけど、ランカちゃん本人が百万個のイルミネーションよりも光輝いている。

驚かされたドキドキよりも、どうしようもなく自分がランカちゃ

んを好きなんだってドキドキが脳に回って、気の効かない言葉しか返せない。

デートが決まってから今日までのドキドキした気持ちの総量よりも、この一瞬のドキドキの方が上回っている。

「あはははは、ごめんね」

「ん……い、いいよ。それより今日の服可愛いね？」

うおーい、僕の馬鹿野郎!?

『今日の』服が可愛いじゃ、いつも可愛くないみたいじゃないか！しかも、何の捻りもないよ！そうだ、君は百万のイルミネーションより綺麗だよ、で行こう。まだ間に合うはずだ……！

「あのさ」

「ありがと！ 君も頑張って決めてきたんだね」

「う、うん」

気の利かない駄目な僕の言葉でも、ランカちゃんは笑ってくれる。

「うー……でも寒くなってきたや。そろそろ行こっか！」

そう言って差し出されたランカちゃんの右手を、僕は握った。ランカちゃんはきつと天使の生まれ変わりに違いない。

「あはは、右手と右手繋いだら歩けないよ」

「う、ごめん!？」

そして、僕の前世が団子虫なのは確からしい。

それからの時間はまるで夢のようだった。

奮発して予約したフランス料理のレストランは、どの席もやっぱりカップルでいっぱい。でも、勝ちも負けも感じない。正面に座るランカちゃんから目が離せない。

ランカちゃんは嬉しい話なら嬉しそうに、悲しい話なら悲しそうにしてくれて、話が上手くない僕からどんどん言葉を引き出してくれる。

僕はこんなに話せるのか。そんな新鮮な驚きを覚えるくらいだ。だけど、そんな夢のような時間ももう終わりだ。

「すつごく美味しかったね！ 最初はお肉にオレンジのソースって……とか思ったけど、すつごく気に入ったよ！」

「そ、そうだね。僕も初めてフランス料理を食べたけど、美味しかったね」

嘘だ。実は予行演習で三回行った。

レストランを出た僕達は、また手を繋いで駅にゆつくりと歩いていた。歩くスピードを合わせているわけではなくて、この時間が少しでも長く続くように。

自分でも末練がましくて、浅ましく思う。だけど、僕はランカちゃんが好きなんだ。

繁華街から少し離れた道。夜空は丸いお月様。

「あ、雪だあ」

そう言っ て空を見上げる彼女の横顔は、とても綺麗で。 僕は彼女に自分の気持ちを伝えようと、素直に思えた。

「ランカちゃん」

「それは私のふけだあああああああ！」

「ギャー！」

そのふざけた声に上を見れば、電柱にしがみつく半裸の男が、頭から派手にふけを飛ばしていた。

「へ、変態だ！？」

「ノン！ 例え変態だとしても変態という名の紳士！ とうっ！」

自称変態紳士は見事に三回転しながら、電柱から飛び降りた。汗ででかる上半身は筋肉で盛り上がり、下半身はプロレスラーのような赤いビキニパンツ一枚。頭に被った馬のお面は目が死んでいた。

「私はフランダースの猫のメロの命日を祈る会の者である！ この悲しき日を性夜に変える不届きなカップルに天からの裁きを下す！ 『あ、雪……』 だなどとラブコメ時空を作る者にやらせはせん！ やらせはせんぞ！」

「ランカちゃんは僕が守る！ 早く逃げて！」

「貴様ア！ いちゃつきおって！ モテない者の恨みを知れい！」

変態の前にランカちゃんを置いてはおけない。その一心で僕はランカちゃんを背負うように前に出た。

高速で反復横飛びを繰り返す筋肉の壁がじりじりと迫ってくる。飛び散る汗は控えめに言っても臭いし、生理的嫌悪を掻き立てる。

「でも、逃げるわけにはいかない！」

「よく吠えた小僧！ 私のおいなりさんを味あわせてくれるわ！」

変態が腰を落とし、まるで狼が兎に襲いかかる姿勢を見せたその時。

「あ、あの……キョウサクさんですよ」

「……イイエ、チガイマス」

ランカちゃんの言葉に変態がぴたりと動きを止めた。

「……誰？」

「うちのお隣さん……」

「ワタシはヘルメン男爵。夢と希望の国からヤツテキタ紳士デス」

「キョウサクさん……今年で三十歳になるんですよ」

「うわぁ……」。

「お、お、お前、今、俺を笑ったな！？」

キョウサクさんは僕の襟首を掴んで、思いつき揺さぶり始める。
そのあまりの力に抵抗一つ出来ない!?

「あわわわわわわわ」

「お前に俺の……非モテの気持ちかわかるかあ!？ 彼女が欲しいんだよ！ でもな、俺と付き合ってくれる女の子なんていないんだよ！ だから俺はこんな事しか出来ないんだ！」

それは魂の慟哭だった。わかる。わかるよ、その気持ち！
そう言ってキョウサクさんを抱き締めてやりたくなる。 だけど
今の僕は彼の敵になってしまったんだ。

「彼女が出来ないって言いますけど……努力したんですか？」

すぱっと切れる言葉の一撃が、キョウサクさんの動きを止めた。

「え、いや……そりゃ色々」と

「例えば何したんですか？」

「フ、ファッション誌を買いました……」

「キョウサクって見かけると、同じ服ですよ。 ファッション誌見て買った服はいつ着てるんですか？」

「オシャレなお店に買い物に行く服がなくて……」

「……正座しなさい」

「え……」

「そこに正座しなさい！」

「は、はいいい！？」

こええ……何だかわからないけど、本気で怒ったランカちゃんの迫力に負けたキヨウサクさんが、アスファルトの上に正座をさせられた。

「キヨウサクさん、ファッション誌を読んで何か変わったんですか？ 服買いに行けてもいないんですね」

「はい……何も変わっていません」

「それで彼女作る努力になってるんですか」

「なってます……でも僕みたいな非モテはコンビニでファッション誌買うだけで限界なんです」

うなだれる馬のマスクは、とても物悲しかった。

そんな可哀想な彼の様子に、ランカちゃんの怒りが更に燃え上がっただけで、コンビニの店員さんに「ぶつ、こいつこんなの買ってるよ」と思われてるんじゃないかと考えると……。

「言い訳するんじゃないよ！ 彼を見てください」

「僕？」

こっちを見る馬。 見つめ合うと気持ち悪いな……。

「どう見ても狙い過ぎて、大怪我してますよね！」

「そんな風に思われてたの!？」

「確かに……」

「半裸の馬にまで言われた！」

ガ、ガイアが僕に輝けって言ってくれたんだよ。 黒は男の戦闘服なんだよ……。

「でも、こうやって失敗してるけど、頑張ってるじゃないですか。それに比べてキョウサクさんは情けないですね」

「確かに……彼を見ていたら私も頑張ろうという気が起きてきた! ありがとう、青年！」

「悪気が一切、感じられないのがなおさら不愉快だな！」

「あとキョウサクさんって、いつも私と目合わせてくれませんかよね」

「そ、それは……」

気持ちはよくわかる。 女の子の目を見ながら話すなんて、かなり難易度高いよね。

「今日……正直、私は彼の服を見ると笑いそうになるから必死でし

た」

とりあえず僕も正座しよう。小石が足に食い込むけど、この痛みが僕の罪なんだ。

「ですけど、相手の耳を見るようにしましょう。こうすれば相手には目を見ているように感じさせますが、実は見てないから簡単ですよ?」

「おお、本当だ!」

なるほど。確かにそれなら恥ずかしくないな。

「でしょー?」

しかし、キョウサクさんはマスクで目が見えないけど、あれでいいんだろうか。

「キョウサクさんだって頑張れば、きっと彼女が出来ますよ! 多少、顔があれでも小綺麗にして、相手の事を考えてお話すれば悪く思う人はあまりいないはずですよ」

「ありがとう……ありがとう、ランカちゃん。今日から本当に彼女を作るために頑張ってみるよ」

むせび泣くキョウサクさんは、きつと別の道を歩いてきた僕の姿なのだろう。

絶対にこうはなるまい。心に固く誓った。

「あ、あともう一つ」

ランカちゃんは僕の方を振り向く。 電灯がまるでスポットライトのようで、

「恋人を作りたいなら、一歩踏み出す勇気が必要だよね？」

そう言って微笑むランカちゃん。 よく見れば、彼女の頬は赤く染まっている。

今日一日、ランカちゃんに手を引かれていた気がする。

ここまで手を引かれてきたんだ。 せめて最後くらいは、

「僕は」

勇気を振り絞ろうと決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6108z/>

なんてったって僕はクリスマスにデートをするリア充

2011年12月20日15時49分発行